令和元（２０１９）年　７月１２日

学位（博士・言語教育学）申請論文　審査報告書

〈学位申請者〉　鈴木　今日子（スズキ　キョウコ）

〈学生番号〉　G2D5012015

〈論文題名〉　認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的意味

審査委員

主査　外国語学部教授　　遠藤　裕子

副査　外国語学部教授　　小林　孝郎

副査　外国語学部教授　　平山　邦彦

Ⅰ．論文の主旨

本論文は、日本語のテ形接続文について、従来の統語論の知見に語用論、認知言語学の理論を統合した複合的な視点で分析して、その中核的意味を抽出し、またテ形接続文の意味内容の推測がどのようになされるかを探ったものである。以下、論旨の主たる部分をまとめる。

テ形接続の意味関係は、「継起、因果、並列、付帯」の４つに集約することができるが、これらは連続したものであり、包括的な意味を持つ。語用論的には、テ形接続文は意味のまとまりのテーマを持つ 1 つの談話であり、発信者の使用意図と受信者の意味内容の推測という双方のやりとりの上に成り立つ。このプロセスにおいて、受信者は語彙、文脈、経験、文化などを手がかりに意味内容を推測するが、発信者の意図と受信者の推測が必ずしも一致するとは限らない。中国語を母語とする日本語学習者を対象とした調査でもその実態が観察された。

認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的な意味は、「テ節の事象が強く背景化され、その「地」の上に後続節の事象が「図」として重なり」「全体として 1 つのまとまりのある像を形成する」ことである。これを、4 つの意味関係（継起、因果、並列、付帯）ごとに論証した。

また、テ形接続の中核的意味と受信者による意味内容の再構築プロセスは、一定の表現効果につながることー具体的には、小説の世界のイメージ形成や登場人物の認識のプロセスの表現などーを明らかにした。

本研究の成果は、日本語教育現場におけるテ形接続文の指導にあらたな視座を提供するものと考える。

Ⅱ．論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

第１章　序論 …… 1

1.1 研究の動機

1.2 研究の目的と意義

1.3 研究方法

1.4 本論の構成

第２章　統語論からみた接続形式テ …… 5

2.1 「テ」の文法的位置づけ

2.1.1 接続助詞「テ」

2.1.1.1 接続助詞「テ」の定義

2.1.1.2 接続助詞「テ」への批判

2.1.1.3　接続助詞「テ」が表わす意味関係
2.1.2　活用形の一部の「テ」
2.1.3　「連用形＋テ」
2.1.4　まとめ
2.2.　接続形式テの機能
2.2.1　従属節形成機能
2.2.2　接続機能
2.2.3　連用修飾機能
2.2.4　構造的並列機能
2.2.5　テ節の意味的機能
2.2.6　まとめ
2.3.　テ形接続の意味用法
2.3.1　修飾関係による意味用法の分類
2.3.2　時間関係による意味用法の分類
2.3.3　意味関係による意味用法の分類
2.3.4　時間関係と意味関係による意味用法の分類
2.3.5　修飾関係、時間関係、意味関係による意味用法の分類
2.3.6　まとめ
2.4　統語論からみた接続形式テのまとめ

第 3 章　認知言語学的アプローチによるテ形接続文の中核的な意味の捉え方 ……47
3.1　接続形式テの文構造における役割
3.2　談話としてのテ形接続文の整合性
3.2.1　「付帯(様態)」関係を表わすテ形接続文の整合性
3.2.2　「継起」関係を表わすテ形接続文の整合性
3.2.3　「因果」関係を表わすテ形接続文の整合性
3.2.4　「並列」関係を表わすテ形接続文の整合性
3.2.5　まとめ
3.3　テ接続文における事象関係の捉え方
3.3.1　認知言語学の考え方
3.3.2　図と地からみたテ形接続文の事象関係の捉え方
3.3.2.1　「継起」関係を表わすテ形接続文の図と地の区分
3.3.2.2　「因果」関係を表わすテ形接続文の図と地の区分
3.3.2.3　「付帯（様態)」関係を表わすテ形接続文の図と地の区分
3.3.2.4　「並列」関係を表わすテ形接続文の図と地の区分

3.3.3　まとめ
3.4　認知言語学的アプローチによるテ形接続文の中核的な意味の構築
3.4.1　テ形接続文の事象間の時間関係の捉え方
3.4.1.1　認知文法におけるテンスとモダリティ
3.4.1.2　認知文法におけるアスペクトの把握
3.4.2 認知文法からみたテ形接続文の重層的意味構築
3.4.2.1 「付帯（様態）」の意味構築
3.4.2.2 「並列」の意味構築
3.4.2.3 「継起」の意味構築
3.4.2.4 「因果」の意味構築
3.4.2.5　まとめ
3.4.3　接続形式「テ」の事象認識の歴史的変化
3.4.3.1　古典文法「テ」の時間認識
3.4.3.2　古典文法のテ形接続の意味用法
3.4.4　まとめ
3.5　テ形接続文の中核的な意味の捉え方

第 4 章　小説におけるテ形接続文の表現効果 …… 93
4.1　テ形接続文の表現効果　調査の目的
4.1.1 テ形接続文の表現効果　先行研究
4.1.2 小説におけるテ形接続文表現効果　調査概要
4.2　小説世界のイメージ形成
4.2.1 場面・人物の背景イメージ像形成
4.2.2 登場人物の動きのイメージ像形成
4.3　登場人物の認識のプロセス
4.3.1 知覚
4.3.2 視線の移動
4.4　レトリックとしての表現効果
4.4.1 台詞部分との併用
4.4.2 テ節複数回使用
4.4.3 連用中止形との併用
4.4.4 テ節言いさし文
4.4.5 テ形接続文への句挿入
4.5 まとめ

第５章　中国語母語話者のテ形接続文の意味推測 ……120
5.1　語用論的推論
5.1.1 会話の協調原理
5.1.2 関連性理論
5.1.3 認知語用論
5.1.4 テ形接続文の意味推測
5.2. テ形接続文と中国語の文の並列の意味用法の相違
5.2.1 中国語の文の並列
5.2.2 テ形接続文と中国語の文の並列の意味用法の相違
5.3　中国語母語話者のテ形接続文の意味推測
5.3.1 調査概要
5.3.2 調査結果
5.3.3 分析・考察
5.3.3.1 文の並列表現による包括的意味推測
5.3.3.2 意味関係の明示化による積極的意味推測
5.3.3.3 文と意味の再構築による積極的意味推測
5.4　まとめ

第６章　中国語母語話者のテ形接続文の使用と認識 ……150
6.1　日本語学習者のテ形接続文の誤用に関する先行研究
6.1.1 テ形接続文の構造から見た誤用分析
6.1.2 日本語学習者の母語との比較から見たテ形接続文の誤用分析
6.1.3 日本語学習者のテ形接続文の誤用に関する先行研究まとめ
6.2　中国語母語話者のテ形接続文の使用と認識
6.2.1 文接続の符号として使用されるテ
6.2.2 テ節の複数回使用
6.2.3 テ形接続によって表わされる意味関係
6.2.4 テ節による行為の前掲
6.3　まとめ

第７章　テ形接続文の中核的意味を取り入れた指導の提案 …… 177
7.1　日本語学習におけるテ形接続文の難しさと従来の指導法
7.1.1 日本語学習におけるテ形接続文の難しさ
7.1.2 テ形接続文の従来の指導法
7.1.3 テ形接続文の従来の指導法の問題点

7.1.3.1 テ形接続文の学習の難しさに対する従来の指導法の問題点
7.1.3.2 テ形接続文の従来の指導法に共通する問題点
7.1.4 日本語学習におけるテ形接続文の従来の指導法の問題点のまとめ
7.2　テ形接続文の中核的意味を取り入れたテ形接続文の指導の提案
7.3　今後の課題

第８章　結 語 ……193
8.1　本論で明らかにしたかったこと
8.2　本論で明らかになったこと
8.2.1 統語論からみたテ形接続文の捉え方
8.2.2 認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的意味
8.2.3 テ形接続文の表現効果
8.2.4 中国語母語話者のテ形接続文の意味推測
8.2.5 中国語母語話者のテ形接続文の使用と認識
8.2.6 認知言語学的視点を取り入れたテ形接続文の指導の提案
8.2.7 まとめ
8.3　今後の課題と展望

謝辞
参考文献……200
出典・資料 …… 203

Ⅲ．本論文の概要

第１章　序論

本章では、研究の動機、目的と意義、研究方法、論文の構成について述べている。

テ形接続文は、テ形の前後の意味関係が受信者の推測に委ねられるという曖昧な接続表現であり、かつ大変使用頻度の高い表現である。なぜ、このような表現が多用され、コミュニケーションが成立しているのか、そのメカニズムに迫りたいと動機を述べている。

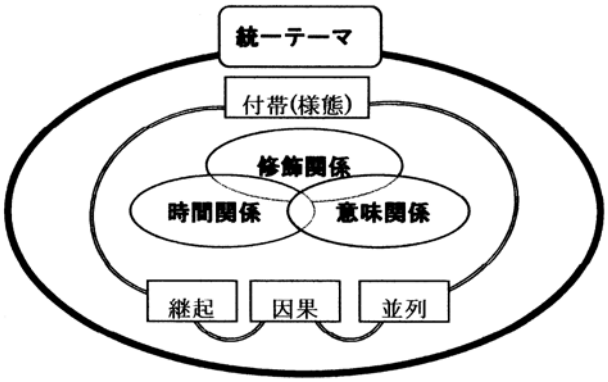
本研究の目的は、テ形接続文の意味内容の推測がどのようになされるのか、また、「テ」の中核的意味は何かを明らかにすることである。研究の立場としては、統語論に、語用論、認知言語学の知見を加えて考察し、中核的意味を抽出するとしている。また、小説を調査対象にして表現効果を考察し、さらに、日本語教育の立場からテ形接続文の効果的な指導法を提案すると述べている。

第２章　統語論からみた接続形式テ

本章では、統語論における「テ」および「テ形接続」に関する先行研究の主張・立場を分析・整理し、筆者の考えるテ形接続の機能と意味用法をまとめている。

接続形式テは、文を接続するという構文的な機能を持つが接続の意味関係は表さず、それは前後節の語彙的意味や文脈で決まる。そして、テ形接続の意味関係は、「並列、継起、因果、付帯（様態）」の４つに集約できる。また、テ形接続文は、前後節を貫く統一テーマを有し、テ形接続の意味関係は、この統一テーマのもと、「修飾・時間・意味」の３つの観点から総合的に判断できると主張している。

テ形接続の意味用法と観点の相関性を表した図を次に掲げる。



第３章　認知言語学的アプローチによるテ形接続文の中核的な意味の捉え方

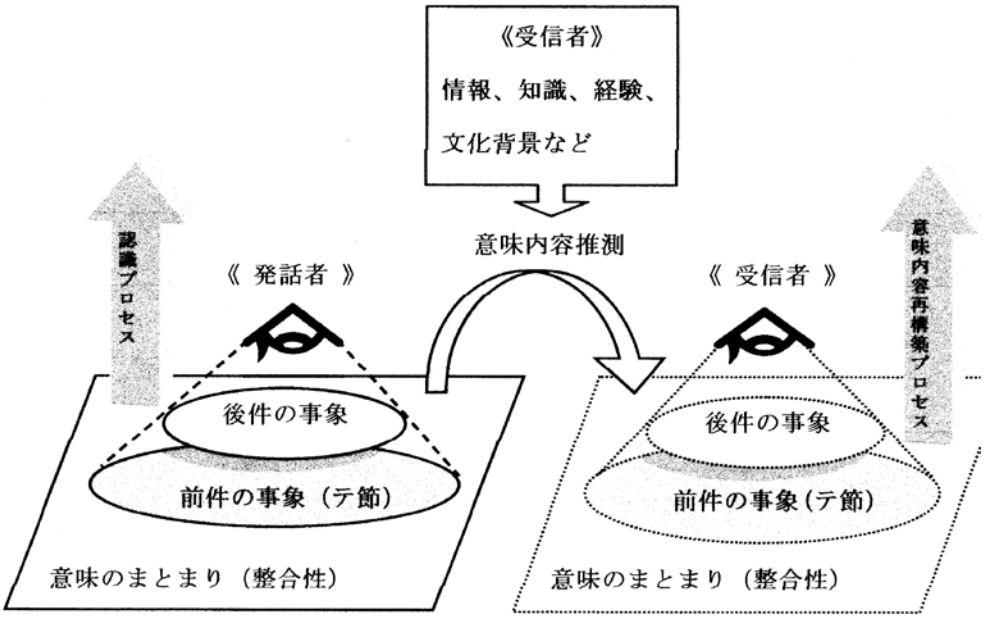
本章では、認知言語学の考え方に基づいて、テ形接続文の中核的な意味を抽出している。

まず、談話としてのテ形接続文の整合性を、４つの意味関係（付帯、継起、因果、並列）について説明している。そして、テ形接続文においては、「前節の事象が強く背景化され、その「地」の上に後続節の事象が「図」として重なり、全体として１つのまとまりのある像を形成すること」を４つの場合について類似表現と比較しながら論証した。これが、中核的な意味である。

テ形接続文は、受信者（聞き手／読み手）に、前節と後節の事象間の関係推測を強いる力がある。受信者は、情報・経験・文化的背景などを手がかりに、発信者（話し手／書き手）の認識のプロセスをたどってテ形接続文の意味内容を再構築すると主張している。

また、現代語のテ形接続文は、古典文法における接続の意味関係より狭くなったことを論じている。

テ形接続文の認識プロセスと意味内容の再構築プロセスを表した図を次に掲げる。



第 4 章　小説におけるテ形接続文の表現効果

本章では、11 編の現代小説を対象に使用例を分析し、テ形接続文にはどのような表現効果があるかを明らかにしている。

調査・分析の結果、場面や人物の背景イメージ像および登場人物の動きのイメージ像形成という小説世界のイメージ形成や、登場人物の知覚および視線の移動といった認識のプロセスの表現などにテ形接続文が効果を発揮していることがわかったと述べている。さらに、テ節の複数回使用や言いさし等については、余韻や期待感等のレトリック効果につながることなどを論証している。

これらの効果は、「背景化されたテ節の事象に、後続節の事象が重なって１つの像をつくる」という中核的意味と、読み手による意味内容の再構築プロセスによってもたらされたものであるとまとめている。

第 5 章　中国語母語話者のテ形接続文の意味推測

本章では、中国の大学で日本語を専攻する日本語学習者を対象に調査を行い、学習者がテ形接続文の意味推測をどのように行っているかを中国語訳文から分析し、語用論の見地からいくつかの新たな知見を述べている。

まず、意味関係を積極的に推測せず中国語の並列に置き換える受信者がおり、この場合はテ形接続文の持つ包括的な意味は保たれる。一方、意味を明示的に表す語句を付加するなど、積極的に意味推測する受信者も見られる。この場合は、選択した意味以外の可能性は捨象されることになるとしている。

中国語にはテ形接続文の類似表現があるため、意味推測は比較的容易であると考えられ

るが、中国語の類似表現の方が意味範囲が広いため、発信はしにくいと指摘している。

第 6 章　中国語母語話者のテ形接続文の使用と認識

本章では、まずテ形接続文の誤用に関する先行研究をまとめ、次に、中国語を母語とする日本語学習者の作文から接続の意味関係が読み取れない文を抽出し、誤用が生じる原因を中国語文法との対照分析と書き手へのインタビューから明らかにしている。

テ形接続文の類似表現である中国語の文の並列表現は「仮定」も表すことができる。この場合、日本語母語話者はその意味関係を推測できないために「誤用」と判断されるとしている。また、独立可能な文の並列をテ形接続文に置換えると、テ節と主節との関係が読み取りにくくなることがあり、その場合に意味関係の推測が不能となると述べている。

日中の両表現の意味関係の範囲は中国語の方が広く、テ形接続文は、受容は容易で産出は難しい傾向があることを論証している。

第 7 章　テ形接続文の中核的意味を取り入れた指導の提案

本章では、ここまでの章で明らかにした、テ形接続文の中核的意味や意味の捉え方を、日本語教育における従来の指導法に加える意義を論じている。

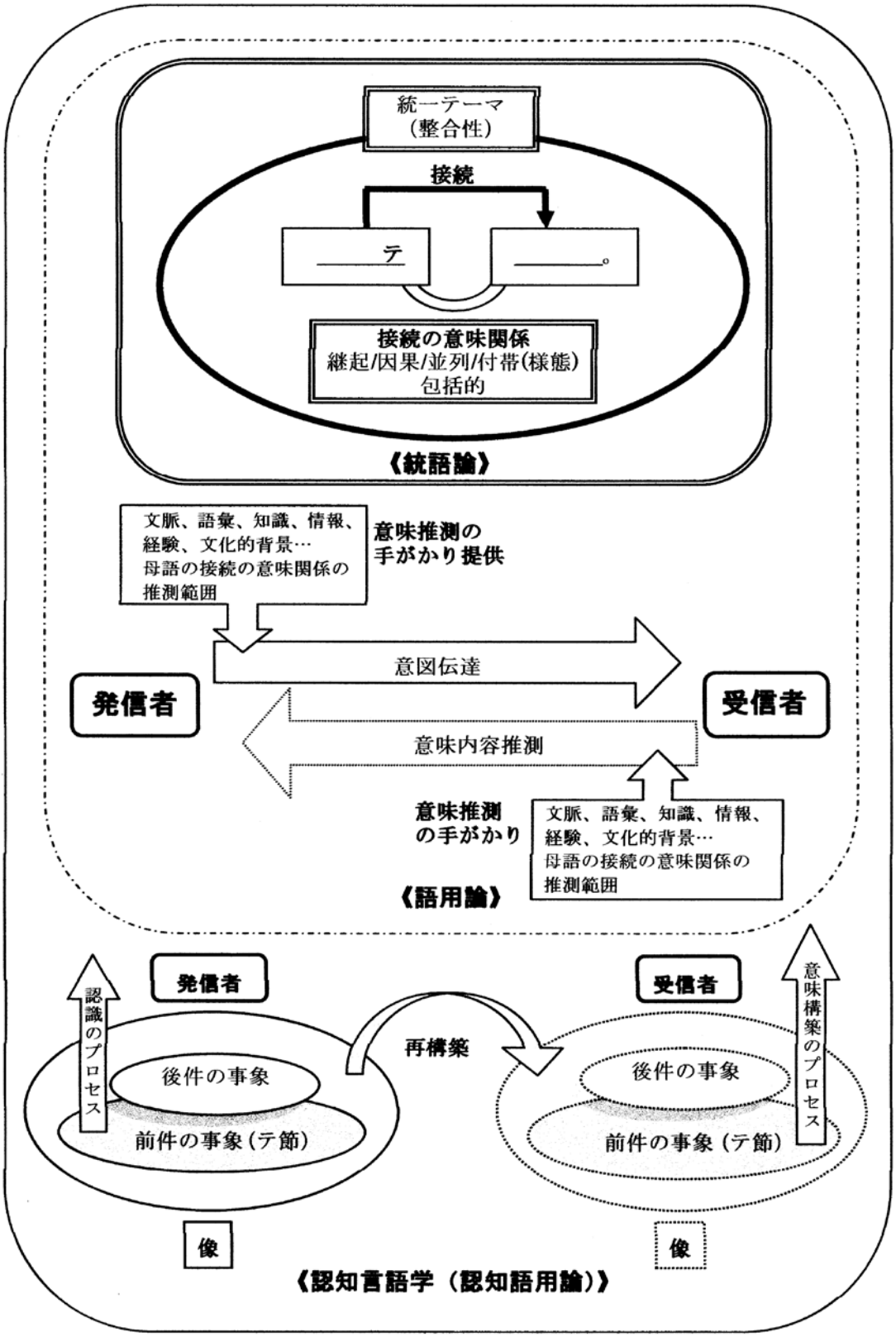
まず、従来の指導法の問題点をまとめ、その上で次の３点を提案している。１点目は、接続形式テは接続の意味関係を包括的に表すという本質を学習者に理解させること、２点目は、テ形接続文の意味関係の推測は受信者に委ねられるものであり、推測の手がかりの提供が重要であることを理解させること、３点目は、テ形接続文の表現効果を認識させることである。

今後は、従来のテ形接続文の指導法に認知言語学や語用論の視点を取り入れた指導を教育現場で実践・検証していき、具体的指導内容を深めていきたいと締めくくっている。

第 8 章　結語

本章では、第 7 章までに述べた内容をまとめ、今後の課題と展望について述べている。

「テ形接続文の捉え方　統語論・語用論・認知言語学」として本研究の主張を簡潔に表した図を次に掲げる。


統一テーマ
（整合性）
接続
テ
。
接続の意味関係
継起/因果/並列/付帯(様態)
包括的
《統語論》
文脈、語彙、知識、情報、
経験、文化的背景…
母語の接続の意味関係の
推測範囲
意味推測の
手がかり提供
意図伝達
発信者
受信者
意味内容推測
意味推測
の手がかり
文脈、語彙、知識、情報、
経験、文化的背景…
母語の接続の意味関係の
推測範囲
《語用論》
発信者
認識のプロセス
後件の事象
前件の事象（テ節）
像
再構築
受信者
意味構築のプロセス
後件の事象
前件の事象（テ節）
像
《認知言語学（認知語用論）》

Ⅳ．論文の総合評価および結論

１．論文提出から審査までの経緯

学位申請者は、2012 年 4 月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学した。国際交流基金（北京）に日本語専門家として赴任するため一時退学し、2015 年 9 月に復学した。外国語（中国語）検定試験に合格し、修了に必要な 10 単位以上を取得している。

完成論文発表会は、2018 年 12 月 20 日に実施され、論文は 2019 年 4 月 9 日に提出され受理された。論文提出時の業績は、言語教育研究科博士論文中間発表会、及び、学内外における論文と口頭発表を合わせて 9 本（単著 6 本、共著 3 本）である。

第 1 回審査委員会を 2019 年 5 月 24 日に開催した。審査の結果は全員一致で合格であったが、用語の整合性などに若干の不備があったため、その書き直しを行ったうえで博士論文として認めると判定した。2019 年 7 月 6 日、最終口述試験を行い、続いて第 2 回審査委員会を行って審議した結果、最終的に「合格」と判定した。

２．審査所見

本論文は、テ形接続について、従来の統語論の知見に、語用論と認知言語学の枠組みからの分析を統合し、テ形接続文の中核的意味を抽出し、意味内容の推測がどのようになされるかを明らかにしたものである。このテーマ設定、研究方法、そして結論は、高く評価されるものである。

本論の卓越した点は、まず、種々様々のテ形関連の先行研究を概観した上で、テ形にしぼって分析の観点などを整理し、統語論的に一定の結論に導いたことが挙げられる。この丁寧かつ緻密な文献研究が、語用論と認知言語学的アプローチによる分析成果へつながっていると考えられる。

認知言語学に関しては、山梨（2004､他）、Talmy（1978）などに基づいて論を展開している。テ形接続の中核的な意味として、背景化され「地」となったテ節の事象に後続節の事象が「図」として重なり、1 つのまとまりのある像を形成する、と結論づけ、テ形接続文の意味内容が重層構造をなしていると主張しているが、論述および筆者考案の図式とも説得力があると認められる。

3.4.3 において、古典文法におけるテは発話者の事象実現の認識であるとし、中核的な意味の認識と時間認識が現代文法と異なり、現代語ではテ形の意味用法の幅が狭まったと述べている。この説も、着眼点の良さと俯瞰的な捉え方が評価に値する。

また、小説における表現効果（第 4 章）と日本語学習者の意味推測（第 5 章）の調査はともに先例のほとんどない調査であって、研究方法、結果・分析ともに貴重であり、評価できる。

第 7 章では、本研究の目的でもある日本語教育への適用に言及し、従来の統語論的なテ形接続の指導法に加えて、本論で明らかにした中核的意味や意味の捉え方を取り入れた指

導を提案している。ここには現場の日本語教師の視点が活かされており、理論研究の実践への応用という点で意義のあるものと言える。

一方、問題点としては、次のような点が挙げられる。

中国人日本語学習者を対象とした翻訳調査・分析は、その方法は評価できるが、調査協力者の数や調査文の質と量について、十分な根拠が示されているとは言いがたい。また、日中両言語の対照分析の細かい部分には、課題が残されていると思われる。

最後に用語や表現に関して一言述べると、非常に幅広く先行研究を扱い、また複合的に分析を行っていることもあり、全体的にやや曖昧であったり読みにくかったりする用語や表現が見られる。理論構築に必要な概念の他は、用語の数を絞るとより明快な文章になると思われる。

なお、第１回審査委員会で指摘された用語の整合性等については、既に修正を施した。

以上に示されるように、本論文は、審査基準である研究テーマ、先行研究・調査などの情報収集、研究方法のいずれにおいても適切・妥当なものであり、論旨も妥当なものである。論文の構成、言語表現、体裁などについても、問題はない。本論文は研究内容に独創性を有するものであり、当該分野の研究に貢献をなすものと認められる。

学位申請者は、1992 年西安外国語大学外籍教師を務めて以来、日本の日本語学校、国際交流基金（インド、中国）、中国人民大学などの日本語の専門家として豊富な経験を有するものである。言語教育の専門家として高等教育機関で活躍する能力と学識を十分持つことに疑問の余地はなく、さらなる活躍が期待される。

３．審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、３委員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。